

栄養教諭教職課程履修者の教職に対する意識の変化

長幡友実*・糸見智*・東山幸恵*

1.はじめに

近年、我が国では核家族の増加、女性の社会進出による共働き世帯の増加等、社会環境が大きく変化しつつある。従来、子どもへの食に関する様々な教育は家庭で行われてきたが、大家族で家族揃って食事を摂る、昔ながらの家庭での食事形態が減少したことにより、家庭だけでは教育が難しい状況となっている。また、食品の輸入規制緩和により、戦後直後の食糧不足の時代から一転して飽食の時代を迎えている。さらに、外食・中食産業が発展し手軽に何でも好きなだけ食べられる食環境へと変化した。現在、生活習慣病の若年発症率は増加し、朝食欠食率も若い世代で多い状況¹⁾となっている。こうした背景を受け、平成17年には食育基本法、その翌年には食育推進基本計画が制定された。その中において、子どもたちが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけるために、学校における体系化された食教育の重要性が示されている。

学校における食育を推進するため、平成17年4月に栄養教諭制度²⁾が開始された。栄養教諭は「食に関する指導」と「学校給食の管理」を職務とし、学校における食育活動のコーディネート役としての役割を担う。平成28年度の栄養教諭配置数は全国で5,765名³⁾となり、年々増加しているが、未だ1校に1名の配置とはなっていない。配置数を都道府県別に見てみると、最も多いのは北海道で457名、次いで大阪府436名、福岡県331名、愛知県328名である³⁾。平成29年3月には、学校における更なる食育を推進するため、文部科学省は「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA～⁴⁾」を作成した。それによると各学校で栄養教諭を中心とし、Plan-Do-Check-Actionサイクルに基づいて全教員で食育活動を進めていくことが求められている。しかし、これは栄養教諭の配置されている学校の状況を想定して作成されているため、すべての学校で実践するためには、栄養教諭の全校配置が望まれる。

栄養教諭は管理栄養士や栄養士免許が基礎資格となるため、管理栄養士・栄養士養成校のうち栄養教諭養成が認可された学校で養成されている。本学においては、管理栄養士・栄養士免許取得に必要な単位(92単位以上)を含む卒業に必要な単位(135単位以上)の他に、4年間で教職に関する科目24単位と、栄養に係る教育に関する科目4単位を履修することで栄養教諭一種免許状を取得することができる。しかし、このように栄養教諭の教職履修者は4年間でかなり多くの単位を取得しなければならず、栄養教諭を志望するモチベーションを維持することが必要であると考えられる。また、先述したように全国的にも栄養教諭の配置数はまだ多くはなく、各自治体の新規採用者数も決して多くはない。これらの理由から、本学では毎年1年次に20名近くの学生が教職を履修するが、卒業時には半数ほどまで減少してしまう。また教員採用試験に現役合格する学生も少ない。このような栄養教諭の教職履修者の現状を踏まえ、本研究では、そのサポート体制を見直すための基礎資料を得ることを目的とし、教職履修者の4年間の意識の変化を、質問紙により調査した。

* 東海学園大学健康栄養学部准教授

2. 研究方法

2-1. 調査対象者と実施方法

平成29年1月、東海学園大学健康栄養学部4年次の教職履修者15名（男性1名、女性14名）に対し、集合法による自記式質問紙調査を行った（有効回答率100%）。質問内容を以下に示す。「1. あなたはどの程度栄養教諭になりたいと思っていましたか」について、入学時、2年次春、3年次春、4年次教育実習前、4年次教育実習後の5時点に関して、それぞれ「とてもなりたかった」、「まあまあなりたかった」、「どちらともいえない」、「あまりなりたくなかった」、「全くなりたくなかった」の5件法で尋ねた。また、5時点についてそう答えた理由を記入してもらった。「2. 教育実習は満足いくものでしたか」について、「とても満足」、「まあまあ満足」、「どちらともいえない」、「あまり満足ではない」、「全く満足ではない」の5件法で尋ね、その理由も記入してもらった。「3. 大学4年間で教職履修をやめようと思ったことがありますか」について、「あった」、「なかった」の2件法で尋ね、そう答えた理由も記入してもらった。その他、「教職履修を4年間続けた理由」、「本学の教職課程への不満」等について自由記述で記入してもらった。

2-2. 倫理的配慮

調査実施に関し、質問紙冒頭に本調査の目的と調査への協力は任意であること、協力しないことによって不利益を被ることはないことを記載し、口頭で読み上げ説明を行った。なお、本質問紙調査は無記名で行い、個人が特定されることがないように配慮し、No.1から15の番号でデータ管理を行なった。

2-3. 統計解析

回収した質問紙のデータはSPSS Statistics 21を用いて単純集計を行った。

3. 結果

3-1. 入学時から卒業時までの「どの程度栄養教諭になりたかったか」の変化

「あなたはどの程度栄養教諭になりたいと思っていましたか」という質問に対し、「とてもなりたかった」を5点、「まあまあなりたかった」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりなりたくなかった」を2点、「全くなりたくなかった」を1点とし、15名の入学時、2年次春、3年次春、4年次教育実習前、4年次教育実習後の変化を図1に示した。15名の平均点は、入学時3.33点、2年次春3.07点、3年次春3.13点、4年次教育実習前3.07点、4年次教育実習後3.20点であった（図1赤字）。15名中11名の学生は4年間で3点から4点を推移し大きな変動は見られなかったため図1には示していない。なお、4年次の教育実習後に4点であったのは3名（No.5、9、15）、3点であったのは8名（No.1、4、6、8、11、12、13、14）であった。

図1には4年間で大きな変動のあった4名を示した。まず、2名（No.2、3）は、4年次の教育実習後に5点をつけていた。5点をつけた理由として、「学校の先生として、働く大変さや大切さを学んだ。日々の努力が、少しずつ子どもたちが変化するきっかけになることを学ぶことができたから。」や、「教育実習で実際に子どもたちとふれあい、現場を経験したことで、栄養教諭のやりがいや魅力をととても感じた。」と記入していた。4年次の教育実習後に1点をつけた学生は2名（No.7、10）であった。1点をつけた理由として、「実習で授業を見て、楽しかったし勉強にもなったけど、自分には向いていないと思った。」や「教育実習を通してやる気を失くしたから。」と記入していた。

また、図1に示したようにNo.10は教育実習前後で大幅に点数に変動があったが、他14名は0～1点の変動であった。

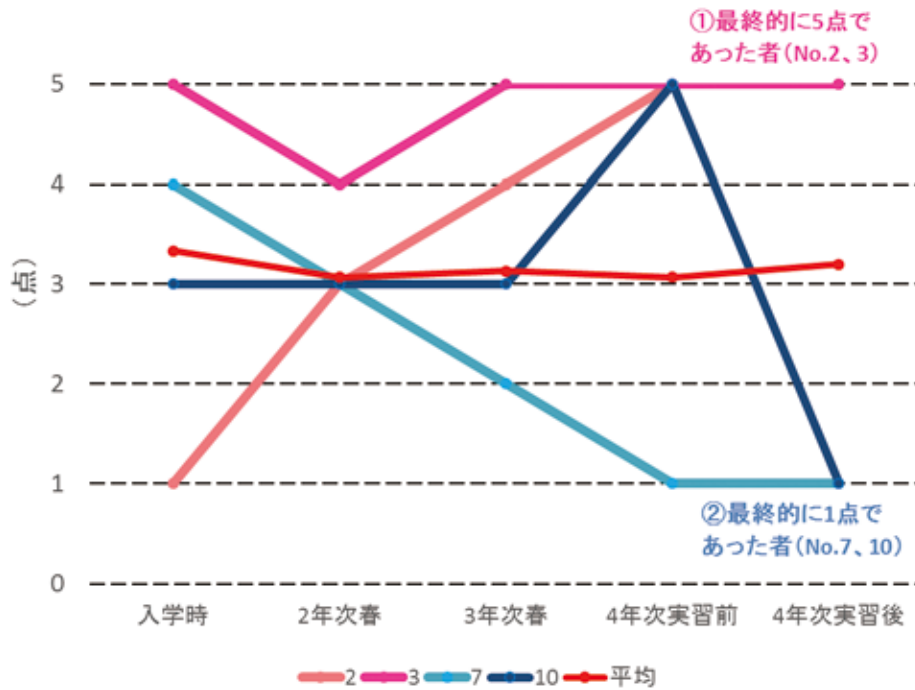


図1 入学時から教育実習後までの「どの程度栄養教諭になりたかったか」の変化

3-2. 教育実習への満足度

教育実習への満足度は「とても満足」「まあまあ満足」を合わせて8割を超えていた。そう答えた理由として、「自分なりに一生懸命考え作った授業を上手く行うことができたため。また、何よりも実習を通して栄養教諭のやりがいを感じたため。」や「貴重な体験ができ、とても力がついた気がした。楽しかった。初めて教職をとって良かったと強く思えた。」「とても良い環境で実習をさせていただき、先生方のおかげで研究授業も自分が思っていた以上にできたから。」等の記載があった。

一方、「あまり満足でない」と答えた1名の理由は「楽しくもなく、児童と触れ合う時間もあまりなかったため、ただ毎日時間に追われているだけだった。」であった。

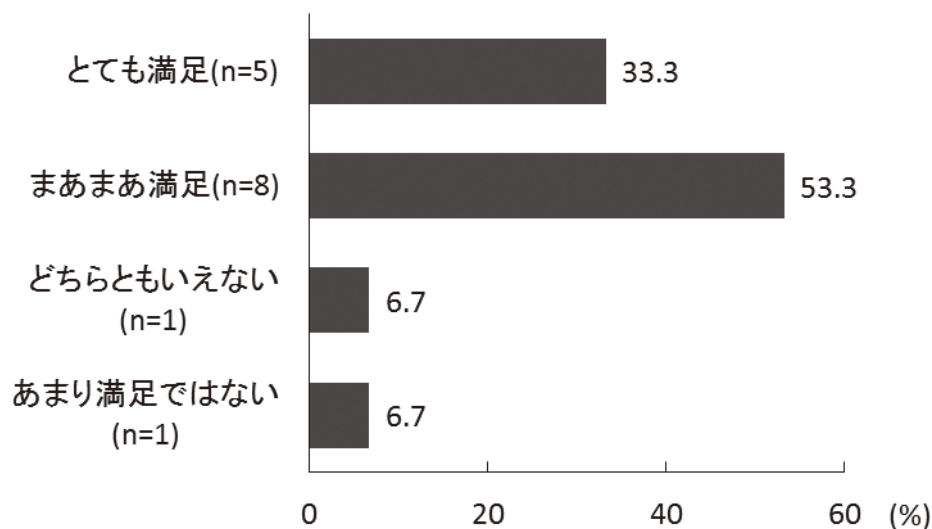


図2 教育実習は満足のものだったか

3-3. 教職履修をやめようと思った経験について

6割を超える学生が4年間で教職履修をやめようと思ったと回答していた。データは示していないが、やめようと思ったことのある学生10名中6名は2年次に、2名は3年次にそう思っていた。そう思った理由としては、「履修科目が多く大変だったから」が最も多く、次いで「他の人の模擬授業を見て、自分には向いていないと思った」であった。

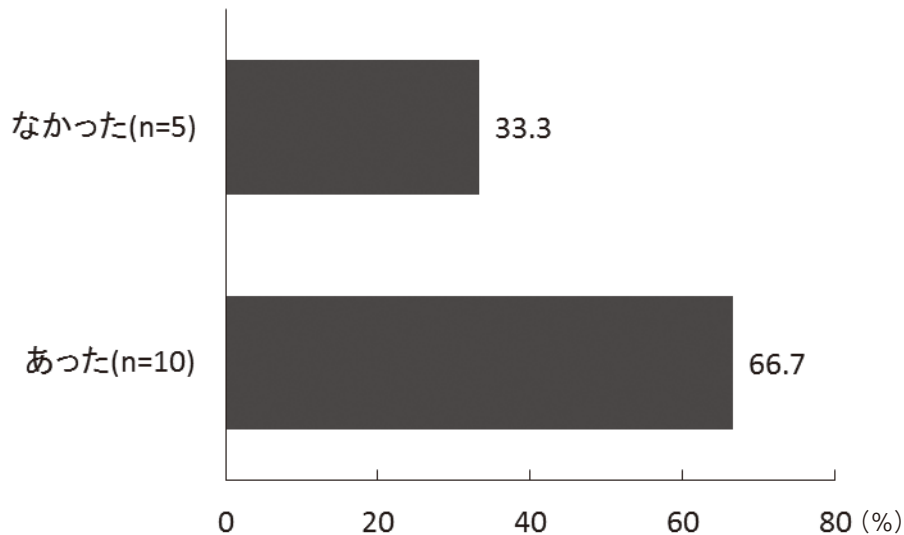


図3 4年間で教職履修をやめようと思ったことはあるか

3-4. 教職履修を4年間続けた理由

表1に示したように、全体として「一緒に教職を履修して頑張る仲間がいたから」や「大変だった時期を乗り越えたから」といった理由が多かった。4年次の教育実習後に「どの程度栄養教諭になりたかったか」に5点をつけた2名(No.2、3)(図1参照)は、「栄養教諭になりたかったから」という理由であった。

表1 教職履修を4年間続けた理由

No	4年間続けた理由
1	学年があがるにつれて、今やめてしまったら今までのが無駄になってしまうと思ったらやめられなかった。
2	楽しかったから(模擬授業など)。教員になりたかったから。
3	栄養教諭になりたくてこの学部に進んできたから。また、授業や実習を通してやはり栄養教諭になりたいと思ったから。
4	1、2年乗り越えたから。
5	授業が多く大変だった時期もあったけど、それを乗り越えたから。
6	意地
7	頑張ったと認めてもらいたかったから。やめるタイミングを逃したから。
8	管理栄養士以外の免許を取りたいと思ったから。
9	1度始めたことをやめなくなかったことと、教職を履修することで、子どもと関わる機会が増えたため。
10	仲の良い友達がいいたから。友達がいなければ辛いと思った時期にやめていたと思う。
11	できるだけいろいろなことに頑張りがかったから。最後までやりきりたかったから。
12	教職課程を履修している仲間が大好きだったから。
13	資格が欲しかったため。
14	一緒にやってきた友達と先生が辞めるのを止めてくれたから。
15	同じように頑張る仲間がいたから。2年を過ぎたあたりから辞めるのがもったいなくなった。後に引けなくなったから。

4. 考察

本研究では、今後の栄養教諭の教職履修者のサポート体制を検討する基礎資料を得るため、教職履修者に対し4年間の栄養教諭に対する意識の変化を中心に調査を行った。その結果、入学時から教育実習後までの「どの程度栄養教諭になりたかったか」という意識の変化は平均すると「どちらともいえない（3点）」前後を推移していた。また、教育実習前後ではほとんど変化がなかった。また、教育実習の満足度は8割の学生が「満足、まあまあ満足」と答えており、比較的満足度は高かった。しかし、4年間で教職履修を辞めようと思った学生は6割を超え、辞めずに続けた理由としては「一緒に頑張る仲間がいたから」や「大変だった時期を乗り越えたから」といった理由が多く見られた。

本結果から、全体として教育実習への満足度は高かったが、教育実習前後で栄養教諭になりたい気持ちに大きな変化がみられた者はいなかった。また、最終的に栄養教諭になりたいという強い気持ちを持っていた者は、教育実習前からその気持ちを持っていた。したがって、満足できる教育実習を経験したとしても栄養教諭になりたいという気持ちへはつながらないと推測でき、栄養教諭になりたい気持ちを醸成するためには、教育実習を経験する4年次以前のアプローチが必要であると考えられる。しかし、教育実習の満足度が低いと栄養教諭になりたい気持ちは低下するため、教育実習の満足度は高めておく必要はある。

また、教職履修を4年間のうち、履修科目数の多い2年次において、教職履修を辞めようと思った者が多かった。しかし、最後まで履修を続けた理由として「一緒に頑張る仲間がいたから」や「大変だった時期を乗り越えたから」等の理由があったことから、教職履修者数を4年間維持するためには、教職履修者同士のネットワークを強くし、全体の雰囲気作りをしていく必要があると思われる。

本研究は15名への調査であり、統計的に結論を述べるのが難しい。今後、継続的に調査を行っていく必要がある。また、本学のみでの学生の実態であることから他大学の学生に対する調査も必要であるかもしれない。以上のような限界点は存在するものの、本研究は、栄養教諭の教職課程を履修する学生へのサポート体制を考えるための重要な資料である。

5. まとめ

本調査対象者である平成28年度卒業生の栄養教諭の教職履修者15名は、同年度の教員採用試験に誰も合格することができなかった。その理由として、4年次以前に栄養教諭になりたいという気持ちを醸成できておらず、本気で試験に挑めていなかったことが考えられる。教職履修者間のネットワークを強くしていくことが、今後、教職履修者を増やし、更には教員採用試験合格者の増加につながっていくかもしれない。

参考文献

- 1) 厚生労働省、平成27年「国民健康・栄養調査」の結果、<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000142359.html>（平成29年6月16日アクセス可能）
- 2) 文部科学省、栄養教諭制度について、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/eiyou/（平成29年6月16日アクセス可能）
- 3) 文部科学省、栄養教諭の配置状況、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/_icsFiles/afieldfile/2017/03/27/1257966_1.pdf（平成29年6月16日アクセス可能）
- 4) 文部科学省、栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/_icsFiles/afieldfile/2017/05/17/1385699_001.pdf（平成29年6月16日アクセス可能）

